

平成21年 5月10日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520359

研究課題名（和文） 日本語モダリティ論の再構築に向けての基礎的研究

研究課題名（英文） Basic study for the reconstruction of the framework of Japanese Modality

研究代表者

宮崎 和人（MIYAZAKI KAZUHIRO）

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授

研究者番号：20209886

研究成果の概要：1）語法研究的・要素主義的アプローチから文論・機能主義的なアプローチへ。2）命題とモダリティを切り離す分析から両者の有機的相関性の解明へ。3）主観性モダリティ論から現実性モダリティ論へ。国内外の研究動向の検討および実行系のモダリティの分析を通じて、日本語モダリティ論の再構築は、こうした基本理念に基づいて進められていくべきであるということを確認した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	360,000	2,860,000

研究分野：現代日本語学（文法論）

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：モダリティ、センテンス・タイプ、現実性、実行系、一人称文、文法化、主観化

1. 研究開始当初の背景

(1)日本語のモダリティの研究は、アスペクトやテンスの研究に続いて1990年前後あたりから隆盛を極めたが、現在では沈滞しているとさえ言われる。語法研究はある程度活発

であるが、モダリティとは何かということ突き詰めた本質的な議論が不足しており、明確な意識をもつ研究者においても立場の相違があまりにも大きい。また、日本語のモダリティの研究は、海外の研究とリンクせずに独

自に展開している感がある。国内におけるモダリティの研究は、今、その規定を含め、抜本的な見直しが必要な時期を迎えている。

(2)従来の日本語のモダリティの研究では、助動詞を中心とする認識系モダリティが中心的な対象であり、実行系モダリティの体系化は立ち後れている。特に、希求文や意志文などの話し手自身を行為主体とするタイプについては、表出文として別扱いされてきたという経緯もあり、その位置づけが不明確である。実行系モダリティの研究レベルの底上げと、それを踏まえたモダリティの組織化が急務である。

2. 研究の目的

モダリティをどのように規定すべきかということは、個別言語の個々の形式の意味・用法を記述するだけなら、あまり深刻な問題にはなっていない。規定の優劣や一般性は、あくまでも、文において、モダリティというカテゴリーがどのような役割を担っているか、また、なぜそのような役割が必要であるかを論じることによって、明らかになってくるものと思われる。本研究は、コミュニケーション活動の基本的単位として文が働くために、モダリティはどのような性質をもち、どのように組織化されているかという機能的な視点からアプローチすることによって、日本語モダリティの研究の水準を語法研究レベルから脱却させ、他の研究分野、他言語の研究、海外の言語研究と交信可能なレベルに押し上げるための方策を具体的に提案することを目的とする。

3. 研究の方法

(1)モダリティの規定には、様々なものがあるが、最も普及しているのは、文の意味を命題とモダリティに分け、前者を客観的な事柄内

容とし、後者を主観性あるいは心的態度とする考え方である。この枠組みでなされた研究の成果がすでに数多く出ているが、それ以外の規定や研究方法について検討されることはあまりないように思われる。本研究では、こうした状況を踏まえ、改めて、日本語研究におけるモダリティの規定および研究方法をめぐって、従来の研究を精査・検討する。また、海外の研究を視野に入れて、より一般性の高い研究の枠組みを模索する。

(2)モダリティの規定や方法論を意識した研究の実践として、実行系モダリティにかかわる諸問題について、以下のような観点から考察する。

①<まちのぞみ性>を核とした文の体系を踏まえ、話し手は、まだ実現していない自分の動作を、現実との関係において、あるいは聞き手との関係において、どのようなものとして意味づけるのかといった視点から、一人称文のモーダルな意味の体系について考察する。

②Palmer (2001) の event modality の一種として、動作の実現を望ましいこととして欲する話し手の情意である<まちのぞみ>と話し手から主体への動作の実行指令である<発動>を認め、両者の交渉を、文のモーダルなタイプの体系性の問題として記述する。

③対話において話し手はどのように意志を形成し、聞き手に通達するか、そして、そのために使用される文にはどのようなタイプがあるかという観点から、新たな枠組みでの意志表現の体系化を提案する。

④従来、epistemic modality の形式と比較して、より客観的であり、文法化の度合いが低いとされている deontic modality の形式（シナケレバイケナイ等）の短縮形に生じている意味変化を、文法化（主観化）の観点から分析する。

4. 研究成果

本研究では、研究成果として、以下のことを明らかにした。

(1)一人称文において、話し手は、文の対象的な内容にポテンシャルな動作を描きながら、それがリアルなものへと移行することを欲求し、決意し、覚悟する。この話し手の主体性なくしては、ポテンシャルな動作はリアルなものに決して移行しないという意味で、これは、この種の文のモダリティの中心的な要素である。しかしまた一方で、できることかできないことか、してよいことかよくないことか、しなければならないことかしてはならないことかなど、現実世界におけるその動作の客体的なあり方もまた、話し手の動作の実現を決める条件として、厳しく働いてくる（したくてもできないこと、したくなくともしなければならないことは、いくらでもある）。さらに、話し手の動作は、聞き手との関係の中で、するかしないかが決められる。このようにして、一人称の未実現の動作を表す文のモダリティは、対象的な内容と現実の関係に対する話し手の態度としての主体的なモダリティ、対象的な内容の現実における存在の仕方としての客体的なモダリティ、対象的な内容と聞き手との関係、の3つの側面の絡み合いの中に成立している。

(2)話し手の欲求、希望、願望を表す〈まちのぞみ文〉の対象的な内容は、典型的には、主体に実現できない、あるいは実現できるかどうか分からない動作（できごと）であるが、これが、決意、勧誘、命令、依頼を表す〈発動文〉と同様に意志的に実現可能な動作になった場合、〈まちのぞみ〉を残したまま、含みとして発動性を生じさせ、〈発動文〉へと接近・移行していく。逆に、〈発動文〉の対象的な内容が主体に実現できない、あるいは実現できるかどうか分からない動作（できごと）

と）になったとき、また、発動の対象者たる相手がいないときには、主体に対して発動を指令することができないため、〈発動文〉は発動性を失い、潜在していた〈まちのぞみ〉が前面化する。〈まちのぞみ文〉や〈発動文〉のモダリティは、文の対象的な内容であるできごとと現実および聞き手との関係づけ方に関する諸特徴の有機的な統合の中に成立していて、体系をなしている。両者の間に移行が起こるのは、そのためである。

(3)従来の意志表現の研究は、言語行為論的な視点なしに、個々の文法形式の意味を求めてきたが、コミュニケーション活動において、話し手は、これからの自分の行為をどのようなものとして価値づけ、その実現に向けてどのように意志を形成し、その行為をどのように聞き手とかかわらせようとしているのかという観点から、意志を表す文の体系を描く必要がある。この観点から、〈意志の形成〉を表す文のタイプとして、〈決意〉を表す文、〈誓い〉を表す文が、〈意志の通達〉を表す文のタイプとして、〈予告〉を表す文、〈覚悟〉を表す文、〈実行の用意〉を伝える文が取り出せることを示した。

(4)〈必然〉〈必要〉を表すモダリティ形式としてのシナケレバイケナイ、シテクテハイケナイ等の成立が第一段階の文法化だとすれば、その短縮形シナケレバ（シナキャ）、シナクテハ（シナクチャ）等に生じている、〈必然〉〈必要〉から〈評価性〉〈遂行性〉へという意味変化は、subjectification (Traugott 1986) あるいは agent-oriented から speaker-oriented へ (Bybee et al. 1994) という方向に従った、モダリティの内部での第二段階の文法化であると言える。従来、この種の現象は、語用論的なものと考えられがちであるが、形態変化と一体となっているという点で、文法的なものとして捉えなければなら

ない。

(5)本研究期間中に日本語を対象としたモダリティ研究の最新刊である益岡（2007）が公開された。主観性モダリティ論を牽引し、文の階層構造を重視してきた著者の研究が、現実性モダリティ論へ傾斜し、カテゴリーの連続性を重視する姿勢を見せていることは、日本語モダリティ論が今大きな転回点に立ち至ろうとしていることを暗示している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ①宮崎和人、書評論文 益岡隆志著『日本語モダリティ探究』、日本語文法9巻1号、107-116、2009年、査読有
- ②宮崎和人、〈まちのぞみ〉と〈発動〉の間、岡山大学文学部紀要、48号、77-89、2007年、査読無
- ③宮崎和人、モダリティの主観化について—〈必要〉を表す文の場合—、韓日知的交流と日本学 研究（韓国日本学連合会）、564-569、2007年、査読有
- ④宮崎和人、まちのぞみ文について—「シタイ」と「シヨウ」—、日本語文法の新地平2、41-61、2006年、査読無

〔学会発表〕（計3件）

- ①宮崎和人、対話における意志表明、韓国日本語日学会 2008年夏季学術大会、2008年6月21日、大邱大学校（韓国）
- ②宮崎和人、モダリティの主観化について—〈必要〉を表す文の場合—、韓国日本学連合会 第5回 学術大会 Ⅱ 国際 Symposium、2007年7月7日、誠信女子大学校（韓国）

- ③宮崎和人、一人称の未実現の動作を表す文のモダリティ、日本語文法学会第7回大会、2006年10月29日、神戸大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

宮崎 和人 (MIYAZAKI KAZUHITO)
岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授

研究者番号：20209886